

「心の理論」論争における直接知覚説の新たな展開可能性 ——共現前説から相互作用説、そしてナラティブ理論へ¹——

田中 奏夕

はじめに

我々は、他者の心的状態をいかにして認識しているのでしょうか。この問題は、20世紀後半以降の認知科学や心の哲学において「心の理論 (theory of mind)」論争という形で論じられてきた。この論争では大きく分けて「理論説 (theory theory)」と「シミュレーション説 (simulation theory)」が対立し、現在も活発な議論が行われている。これらの説によれば、我々は他者の心的状態を、推論やシミュレーションといった操作を介したある種の間接的な仕方で認識している。しかし近年、我々の日常的な他者認知がこのような仕方で成り立っているかどうかについて疑念が提起され、それに代わるアプローチが提案されている。すなわち、主に現象学的な伝統から影響を受けた論者たちが提唱する「直接知覚説 (direct perception theory)」である。この説によると、他者の心的状態は第一義的に、理論説やシミュレーション説が想定するような間接的な仕方ではなく、知覚という直接的な認知作用によって与えられる。この見方は、我々の他者認識にそなわる重要な特徴を適切に捉えうるものとして、注目を集め始めている。

このような状況を踏まえて本稿では、直接知覚説を展開するうえでの最良の方向性を探る作業に取り組みたい。直接知覚説の基本的発想は、M・シェーラーやM・メルロ＝ポンティといった古典的現象学者に遡ることができる。そして近年では、彼らの発想を受け継ぎつつそれに改良を加えた「共現前説 (co-presentation account)」という立場が提示され、直接知覚説の有力なバージョンとみなされている (Smith 2010; Gangopadhyay and Miyahara 2015)。これに対して本稿は、直接知覚説の発想は、この共現前説よりもむしろ、S・ギャラガーらが提唱する「相互作用説 (interaction theory)」 (Gallagher 2001; 2005; 2020) の路線をとることでより十全に、また実り豊かに展開できると主張する。そのように主張することの最大の理由は、この相互作用説が、我々の他者認識には「深さ」や「豊かさ」の差異があり、その差異は当の他者との関係性や他者が置かれた状況の理解の深さに依存している、という他者認識に関する重要な事実を捉えるのに適した枠組みだと思われることである。本稿の後半で論じるように、このことは、相互作用説がいわゆる「ナラティブ理論」と自然な結びつきを持つことから見ても取ることができる。

以上の目的を果たすために本稿は、次のように議論を進める。まず「心の理論」論争で対立する理論説とシミュレーション説の基本的な主張を確認し、これらの説に対し共通に提

¹ 本研究は JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2109 の支援を受けたものである。

起される問題点を指摘する (1)。次に、これらの説に対する代替案としての直接知覚説の基本的発想を、シェーラーとメルロ＝ポンティの記述に即して確認する (2)。さらに、N・ガンゴパダイと宮原克典が提示している他者認知理論にとっての三つの制約を基に、初期の直接知覚説がまだ不十分な立場であることを明らかにする (3)。そして、この三つの制約を満たす理論とされている共現前説の主張と不十分な点を確認し、他者認知理論が満たすべき制約としてもう一つ新たなものを加えるべきだと主張する (4)。最後に、ここまで挙げた制約のすべてを満たす理論として相互作用説が展開可能であることを明らかにし、この説が他者との関係性や他者の置かれた状況の認識というナラティブ的理解と自然な接続可能性を持つことを指摘する (5)。

1. 「心の理論」の二つの説と課題

本節では「心の理論」論争における二つの主要な説を概観し、それらに共通すると考えられる問題点を確認する。「心の理論」論争は、1980年代から主に認知科学や心の哲学の文脈で展開されている (cf. 子安 2000)。この論争の中心的な問いは〈我々は他者の心的状態をいかにして認識しているのか〉である。我々は、他者の心的状態 (信念や欲求など) を認識する能力、すなわち「心の理論」を確かに持っているが、この「心の理論を持つ」という事態をどのように理解すべきか、が問われているわけである。そして、この問いに対する答えの方針として、大きく「理論説」と「シミュレーション説」が区別される。

理論説によれば、他者の心的状態は、理論的知識 (素朴心理学 folk-psychology)² を活用することによって認識される (cf. Churchland 1989; Hutto and Ravenscroft 2021)。すなわち我々は、他者の心に関する命題知としての素朴心理学を活用し、理論的な推論を行うことで他者の心的状態を認識している³。例えば、他者が手を挙げてタクシーを呼び止めている場面を私が見ているという状況を考えてみよう。私は、他者が道端で手を挙げているという行動の知覚と関連する理論的知識を組み合わせて、他者はタクシーに乗りたいという欲求を持ち、手を挙げることでタクシーを停められるという信念を持っていると推論する。

それに対して、シミュレーション説によれば、他者の心的状態は、自己が他者と同じ状況に置かれていることを想像的にシミュレーションすることで認識される (cf. Goldman 2006; Barlassina and Gordon 2017)。この「シミュレーション」は、想像力を駆使することによって他者の心的状態を自己の中で再現することを意味している (cf. Barlassina and Gordon 2017)。上述の例に当てはめるならば、私は、他者が道端で手を挙げているのを知覚したとき、もし自分が同じ状況で手を挙げたならば、どのような欲求や信念からそのような行動をとるの

² 信原幸弘によれば、この理論的知識は、例えば「一般に p を欲し、 ϕ を行えば、 p が達成できると信じらるならばそれらの欲求と信念を理由として ϕ を行うという意図が形成される」といった命題で表現できるものである (信原 2014: 221)。

³ 理論説が主張する素朴心理学を主体がいかにして獲得するのかという点には、生得説と経験説という二つの立場が存在する (cf. Hutto and Ravenscroft 2021)。

かを脳内でシミュレーションし、それを他者に帰属させることで他者の心的状態を認識している。

しかしこれら二つの説に対しては、次のような共通した疑念が提起されてきた。すなわち我々は、理論説とシミュレーション説が主張するように他者の心的状態を間接的にしか認識していないのであろうか、という疑念である。D・ザハヴィによると、理論説とシミュレーション説は、他者の心的状態が「不透明で不可視なものである」との前提を共有している(Zahavi 2011: 546)。そしてこのような前提のゆえ、二つの説は、我々は外的な振る舞いの知覚をもとにした推論やシミュレーションという間接的な仕方でのみ、他者の心的状態を認識すると主張している。だが、このような主張が他者認知の日常的なプロセスに合致するかどうかは疑わしい。すなわち、日常的なコミュニケーションにおいて他者の心的状態を認識するとき、我々がその都度、推論やシミュレーションといった意識的な操作を本当に行っているのかは疑わしく思われる。むしろ、理論説やシミュレーション説の説明が当てはまるのは日常生活ではかなり特殊な状況であり、日常的な他者認知において我々は、相手の表情や振る舞いの中で心的状態を直接的に見て取っていると言うべきではないだろうか(cf. Zahavi 2011; Ratcliffe 2007; Krueger and Overgaard 2012)。

このような疑念に対しては、理論説とシミュレーション説が想定する推論やシミュレーションは必ずしも意識的なものではない、という応答があるかもしれない。というのも、近年理論説とシミュレーション説はそれぞれ、ミラーニューロンの共鳴システムなどの脳神経科学の成果を証左として、推論やシミュレーションが暗黙的でサブパーソナル的な働きだと想定しうる可能性を強調しているからである(cf. Spaulding 2010)。

だがこうした応答に対しても、なお疑念は残るように思われる。例えば、脳神経科学の成果からいえるのはせいぜい、ある状況である脳領域の活性化が生じることだけであり、その状況で推論やシミュレーションといった特定の種類の活動が起こっていることの証拠は十分示されていないという批判がある(Gallager 2001: 102)。また、推論やシミュレーションといった操作を、そもそも本当に暗黙的で非意識的な働きとみなせるかどうかについても疑問が提起されている(cf. 信原 2014; Gallagher 2005)。それによれば、問題となる推論やシミュレーションが実際に暗黙的なものであるならば、それらのプロセスは時間的制約を受けず瞬時に行われることになる。しかし、そのような瞬時の理解をもたらす暗黙的な働きが、依然として推論やシミュレーションという操作だといえるかどうかは定かでない。もちろんこのような疑問に対しては、それは用語の問題であり暗黙的な推論やシミュレーションは暫定的な呼び方に過ぎない、といった応答がさらに想定できるが、このような応答は「それでは暗黙的な推論やシミュレーションとは一体何なのか」という新たな疑問を生じさせるだけであるように思われる。

以上のような疑問は、もちろん理論説やシミュレーション説に対する決定的反論には程遠いものだが、これらの説とは異なる観点からのアプローチに目を向けることの動機づけとしては十分なものだろう。そして実際、近年「心の理論」論争での二つの説に対する代替

案として、現象学的な伝統に基づいた「直接知覚説」が提案されている。そこで本稿の残りの部分では、この直接知覚説について検討していくことにしよう。

2. 初期の直接知覚説

本節では、直接知覚説の基本的発想を取り出すために、20世紀前半の現象学者たちの議論を確認する。彼らによれば、他者の心的状態は、推論やシミュレーションといった意識的操作を介さずにその振る舞いの知覚において直接的に認識されている⁴。このような見方は、例えばシェーラーによる次の一節で明確に表現されている。

我々が笑いの中に喜びを、涙の中に後悔と苦痛を、赤面の中に恥ずかしさを、乞い願う手に懇願を、優しいまなざしに愛を、歯ぎしりに怒りを、脅しの拳に威嚇を、言葉の響きにその意味を〔……〕等々を直接捉えられると考えることは、全く確かである。このような考えに対して、しかしこれは「知覚」ではない、それは知覚ではあり「えない」から、また知覚とはもっぱら「感性的感覚の複合体 (Komplex sinnlicher Empfindungen)」に過ぎず、他者の心的なものに対してはいかなる感覚も存在しない——ましてや確かにいかなる刺激も存在しない——から知覚もあり「えない」という人に対して、私はこのように疑わしい理論から離れ、現象学的事実へと立ち戻るようにお願いしたい (Scheler 1973: 254)。

すなわち、我々は、他者の振る舞いや表情の知覚によって得られるものが即座に何らかの心的状態の「表現」であることを認識することができる。そして (理論説やシミュレーション説がおそらくそうであるように) このような考えを受け入れることはできないのは、知覚をもっぱら「感性的感覚の複合体」であると考えことに起因する。つまり、知覚とは、ある対象からの感性的刺激を感覚器官で受容し、それを組み合わせたものであるという「疑わしい」理論を支持している場合には、我々は直接知覚説を受け入れることができないであろう。だが、現象学的な観点からすれば、知覚とは単に感性的感覚を受容することではなく、あくまで対象をある意味を帯びた統一体として把握することであり、他者の心的状態の認知はまさにそのような把握の一種であるように思われる。

さらに、他者の直接知覚に関する類似の主張は、メルロ＝ポンティにも見られる。

⁴ シェーラーが批判している立場は、当時の心理学で有力視されていた「類推説」である。類推説によれば、我々が直接アクセスできるのは自己の心だけであり、他者の心はその身体的な振る舞いを介して、自己自身が振る舞う際の経験から類推することで認知される (cf. 池田・八重樫 2013)。本稿では、理論説やシミュレーション説が基本的には類推説と同じ論点で展開されていると解釈する。すなわち、いずれの理論も他者の心的状態が直接的に認識不可能であり、我々は他者の振る舞いから心的状態を推論しなければならないという点で同様の主張であると考えられる。

私は他者を意味ある行動として知覚する。例えば私は、苦しみや怒りの「内的」経験から何一つ借りてくることなしに、他者の悲しみや怒りを彼の振る舞いや表情、手つきのうちに知覚する。というのも、それは悲しみや怒りが身体と意識とに分けることができない世界内存在の変様であり、私に与えられる私自身の振る舞いにおいて現れるのと全く同じように、その現象的身体において見られる他者の振る舞いにおいても現れるものだからである (Merleau-Ponty 1945: 409)。

ここでは、上述のシェーラーの主張に加えて、我々の他者知覚では、心的状態と振る舞いが区別されていないという重要な観点が提示されている。すなわち、他者の振る舞いを知覚するとき、我々は、その振る舞いをすでにある一定の意味として、つまり悲しみや怒りとして理解している。それゆえ、振る舞いと心的状態の知覚を厳密に区別することは困難であり、また区別する必要もないわけである。

このように、シェーラーやメルロ＝ポンティによると、我々の日常的な他者認知では、他者の心的状態は、理論説やシミュレーション説が主張するような間接的な仕方で認識されるのではなく、振る舞いの知覚において直接的に見て取られている。彼らの立場が「直接知覚説」といわれるゆえんである。

3. 他者認知理論が満たさなければならない三つの制約

前節では、直接知覚説の基本的発想をシェーラーやメルロ＝ポンティの記述に基づいて確認した。しかし、彼らの見解（「初期の直接知覚説」と呼ぼう）がすでにそのままで他者認知に関する十分な理論になっているかといえ、その答えは否定的なものにならざるをえない。本節では、一般に他者認知の理論が満たさなければならない三つの制約を提示したガンゴパダイと宮原の議論 (Gangopadhyay and Miyahara 2015) を手がかりにして、この点を明らかにする⁵。

まずガンゴパダイらによれば、初期の直接知覚説は、他者認知がある種の直接的な仕方で行われていることに対しては十分な説明を与えている。すなわち、前節で確認したように初期の直接知覚説によれば、他者の心的状態は、その表情や振る舞いなどの表現されている部分から十分に理解可能である。ガンゴパダイらは、この点を踏まえて直接知覚説が満たしている制約を次のように表現している (Gangopadhyay and Miyahara 2015: 702)。

(1) 直接性制約 (immediacy constraint) : 他者の心的状態の認識は、我々に対して

⁵ 本稿では「他者認知理論が満たさなければならない制約」という表現で、一般に他者認知理論が合致しなければならない他者認知に関する事実、すなわち、少なくともそれと矛盾してはならず、その成立を説明できることが他者認知理論の利点と数えられるような事実——他者認知理論にとっての「データ」——のことを意味する。

他者の心を直接的に提示する。

直接性制約は、文字通り他者の心的状態が直接的に認識可能であることを述べており、初期の直接知覚説はこの制約を満たしている。この立場によれば、我々は相手の表情や振る舞いの知覚においてすでに（推論などの余分な操作を経ることなく）その相手の心的状態を認識しているからである。この点で初期の直接知覚説は、理論説やシミュレーション説では捉えきれない事態を説明できている。

しかし他方で、理論説やシミュレーション説にも支持できる点がある。そもそもこれらの説が、我々の他者認識を間接的な認知プロセスとして描いていたのは、他者の心的状態が「隠された部分」を有しているという端的な事実があるからである。すなわち、たとえ他者の心的状態の一部が知覚的・直接的に認識されることがあるとしても、他者の心にはそうした直接的認識によっては汲み尽くされない残余的な部分が常にあり、私に対して全面的に透明に与えられるなどということはない（もしそうであったら「他者」の心でなくなってしまふ）。ガンゴパダイらは、他者認知理論が尊重すべきこの事実を、次のような仕方で表している（Gangopadhyay and Miyahara 2015: 702）。

- (2) 超越性制約 (transcendence constraint) : 社会的知覚〔他者の心的状態の知覚〕は、限られた側面においてのみ、他者の心を我々に提示する。

理論説やシミュレーション説がこの事実を問題なく説明できるのに対し、初期の直接知覚説はこの点に関して、少なくとも説明が不十分であるように見える。なぜなら、初期の直接知覚説が述べていたのは、他者の心的状態の認知は多くの場合に直接的（知覚的）であるということだけであり、そうした認知によって提示される以外の「隠された」側面があるかどうかについては何も述べていないからである。

さらにガンゴパダイらは、他者認知理論が満たすべき制約として、もう一つ次のような事実を挙げている（Gangopadhyay and Miyahara 2015: 702）。

- (3) アクセス可能性制約 (accessibility constraint) : 社会的知覚〔他者の心的状態の知覚〕は、他者の心の隠された側面を超越として知覚的にアクセスされ、せいぜい表現的振る舞いの直接的な経験を超越することによって規定される側面として提示する。

ここで述べられているのは、上の超越性制約がいう他者の心的状態の「隠された側面」は、ある時点では隠されていても決して原理的に不可知なものではなく、潜在的に明らかにな

る可能性を有しているということである⁶。すなわち我々の他者経験において、他者の心的状態は隠されたものとして認識されるにもかかわらず、相手への問いかけや探求によって明らかにされうるものとして与えられている、というのがこの制約の内容である。

先ほどの超越性制約の場合と同じく、このアクセス可能性制約は、理論説やシミュレーション説にとっては問題ないが、初期の直接知覚説にとっては説明の及ばない点になる。なぜなら、アクセス可能性制約は、他者の心の「隠された側面」について語っているが、前述のように初期の直接知覚説は、そうした側面を明示的には認めていない（明示的に否定もしていないが）からである。

このように、初期の直接知覚説は、少なくともそのままでは十分な他者認知理論であるとは言えない。それでは、直接知覚説の基本的な発想を維持しつつ、上の三つの制約を満たすような立場を考えることはできるのであろうか。これらの制約を定式化したガンゴパダイらは、そのような直接知覚説のバージョンとして、J・スミスが提唱する「共現前説」(Smith 2010) を挙げている。そこで次節では、その共現前説を主題的に検討してみよう。

4. 他者の心的状態に対する共現前説

スミスの共現前説は、端的に述べると、E・フッサールが提示した知覚理論と、心的状態についての機能主義的な見方を組み合わせることで、直接知覚説の枠内で他者の隠された心的状態の認識を説明しようとするものである。それゆえ共現前説は、直接知覚説の発展バージョンの一つとして理解できる。

フッサールによれば、何らかの事物を知覚するとき、我々はその対象の前面を現前するものとして捉えるのと同時に「絶えず必然的に事物の背面を共に現前させて」いる (I:139)⁷。例えば、目の前にあるマグカップを知覚するとき、私は、このマグカップを単なる二次元的な絵であるとは考えず、まさにマグカップとして意識している。このような知覚は、マグカップが立体的な対象であり、見えていない部分にもマグカップの表面が続いていると意識することによって構成されている。すなわち、我々の対象知覚は、今の位置から感性的に捉えられる現前だけで成立しているわけではなく、つねに背後の可能性が非感性的に共現前することで成立している。

そしてスミスによれば、以上のような対象知覚での現前—共現前図式は、他者知覚に類比的に援用できる。

本の背面が視覚的に現前することなしに視覚的に存在するように、他者の不幸は、その人のしかめ面だけが視覚的に現前していたとしても視覚的に存在する。この

⁶ この制約については、宮原氏本人から私信にて内容の説明をいただいた。もちろん本文中の記述は筆者の責任によるものだが、説明の労をとっていただいた宮原氏に記して感謝する。

⁷ フッサールからの引用は、Husserliana の巻数をローマ数字、ページ数をアラビア数字で示す。

ような考えは、他者の心的状態へのアクセスを知覚的に説明するものである (Smith 2010: 739)。

すなわち、我々は、他者の振る舞いを知覚するとき、今見えている部分の現前と見えていない部分の共現前を共に把握して他者知覚を構成している。それゆえこの意味では、対象知覚と他者知覚は同じ形式を持ったものとして考えられる。

だが同時に、対象知覚と他者知覚における共現前は、完全に同一視できないであろう。すなわち、対象の前面の現前と背面の共現前という図式を、他者の振る舞いの現前と心的状態の共現前へと即座に適用することはできないように思われる。というのも、対象の見えない部分が見方を変えることによって充実可能であるのに対して、他者の見えない部分である心的状態は、どれほど他者の周りを回ったとしても決して充実されないからである (I: 139)。例えば、(悲しみで) がっくりうなだれている子どもを私が知覚したとしよう。このとき私はその子どもに対する視点をいくら移動させたとしても、私にとって感性的に現前するのはその子どもの身体であり、子どもの心的状態 (悲しみ) を直接現前的に知覚することはできない。

しかしこのような差異にもかかわらず、スミスは、他者知覚でも対象知覚のように、共現前する内容の充実が可能であると主張する。この主張を根拠づけるために、スミスは、心についての機能主義的な考え方に訴える。機能主義によれば、心的状態は一般に、ある一群の原因や結果のネットワークによって定義される機能的な状態である (cf. 金杉 2007)。例えば、「悲しみ」という心的状態は、失恋、親しい人との死別、論文の不採用通知、等々の原因から生じ、泣く、うなだれる、無口になる、等々の振る舞いを引き起こすような状態として理解できる。

ここで重要なのは、このような機能的状態としての他者の心的状態は、「予測」によって充実可能だと考えられる点である。すでに述べたように、スミスによれば、我々は、他者を知覚したとき、振る舞いの感性的な現前とともに、その他者の心的状態を非感性的な共現前によって認識している。しかしこの共現前は、それだけにとどまらず、ある心的状態を有している他者がその後とるであろう振る舞いを非直観的な予測という仕方で認識することも意味している。例えば、先ほどの子どもの知覚の場合、もし私はその子どもに「悲しみ」という機能的状態を帰属させるならば、私はそれによって、子どもが泣いたりその後無口になったりするという将来の振る舞いを予測できる。そして、もし本当にその子どもが、このような予測に合致した「調和的な振る舞い」をすることが現前的に知覚されたならば、そのことによって、その心的状態という共現前する内容は充実されることになる。スミス自身は、次のような仕方でこの事態を表現している。

他者の心的状態の共現前は、本の背面のように、共現前するものが現前することによってではなく、共現前するものと現前するものが調和的な経験に関与すること

によって充実すると考えられる (Smith 2010: 741)。

つまり共現前する心的状態の充実は、機能的状態としての心的状態の帰属から導かれる振る舞いの予測が、現前的な知覚内容と一致することで起こりうるわけである。

それでは、以上のようなスミス共現前説は、前節でみた三つの制約を満たしているのだろうか。第一に、すでに見たように共現前説は、フッサールの議論に基づいて、他者の振る舞いの感性的な現前と心的状態の非感性的な共現前が協働して他者知覚が形成されていることを強調している。この意味で他者の心的状態は、直接的に認識されており、共現前説は直接性制約を満たしている。第二に、共現前説は、共現前する内容の充実という点で対象知覚と他者知覚が異なるものであり、他者知覚では、共現前する心的状態が決して完全に充実しないことを強調している。例えば、現前される他者の振る舞いが何らかの心的状態を有していることが共現前的に明らかになったとしても、その心的状態が具体的にどのようなものであるかを知覚的に確定することはできない。それゆえ、他者知覚が他者の振る舞いがある種の心的状態 (主体性) を有していることを認識しているとしても、情動や意図などの心的状態の具体的な内容の確定は、我々の知覚経験を超えているのである。この意味で共現前説は、超越性制約を満たしている。さらに第三に、共現前説によれば、他者知覚における非直観的な予測と、他者に機能的状態を帰属されることで得られる予測が一致するとき、他者の心的状態は知覚的に認識される。この意味で共現前説は、アクセス可能性制約を満たしている。

しかし以上のような利点にもかかわらず、本稿は、共現前説にも他者認識の理論として不十分な点があると考えられる。たしかに共現前説は、隠された部分も含めた仕方で他者認識を説明する理論としては有効かもしれない。だが我々の他者認識は、他者の心的状態を振る舞いの機能的状態として認識しているということで説明しきれないのである。この疑念は、次のような事態を考えてみることでより良く理解できるであろう。例えば、食事をともにしている他者が私に「飲み物が欲しい」と語りかけてくるという場面を想定してみよう。この場合、共現前説にしたがうと、我々は「私に飲み物を求める」という振る舞いを引き起こす状態として「何か飲みたい」という欲求を認識することになる。しかし我々の日常的な他者認識は、それほど単純な認知で完了するわけではない。というのも、「飲み物が欲しい」と語りかけてくる他者が、私にとってよく知られている他者なのか、それとも初めて出会う他者なのかといった違いに応じて、私はその他者に対してどれだけきめ細かく適切な応答をできるかは大きく異なってくるからである。これは、そのとき認識している他者の心的状態の認識の豊かさが異なることを意味している。すなわち、我々が他者の心的状態を認識するという事態は、どのような他者でも同等の結果が得られるというわけではない。相手によって異なる豊かさや深さを持った認知が得られるのである。

以上を踏まえて本稿は、前節で挙げた三つの制約に、次のような四つ目の制約を加える必要があると主張する。

- (4) 他者の心的状態の認識は、問題となる他者との関係性や他者の置かれた状況の理解の深さに応じて、その内容の豊かさや正確さに関して大きく異なる。

この新たな制約に関しては、共現前説も十分な説明を与えることはできていないと思われる。なぜなら、共現前説が想定する我々の他者認知は、当の他者がいかなる種類の心的状態にあるのか——例えば「悲しみ」なのか「痛み」なのか——という点に関わる大まかなものであり、我々が多くの場合に、単なる心的状態の種類の分類を超えた具体的内実を伴った認識をしている点について説明できないからである。すなわち共現前説は、我々が他者の心的状態を「悲しみ」や「痛み」として認識しているだけでなく、「いかなる悲しみなのか」「いかなる痛みなのか」という具体的で個別的な内容まで含めて認識しているという事実を説明できていない。

では直接知覚説の枠内で、この新たな制約を満たすような理論は可能なのであろうか。次節では、直接知覚説のもう一つの発展バージョンとして提案されている「相互作用説」が、まさにそのような理論になりうると論じる。

5. 相互作用説の検討：ナラティブ理論との関連

相互作用説は、ギャラガーによって直接知覚説の発展バージョンとして提案されたものであり、二つの際立った特徴を持っている (cf. Gallagher 2001; 2005; 2020)。

第一に、相互作用説は、私と他者の「二人称的」関係を中心的なモデルとして他者認知を説明しようとする。相互作用説によれば、理論説とシミュレーション説が主張する間接的な認知は「三人称的」関係での他者認知である (Gallagher 2020: 100)。三人称的關係とは、「行為の傍観者や観察者」として他者に関わるような関係であり、そこでは、一方の主体と他方の主体 (観察する主体と観察される主体) の行為の間に相互の直接的な影響はない。しかし、理論説とシミュレーション説への問題提起で示唆したように、三人称的關係での他者認知が我々の日常的な他者経験に適用できる場面は多くない。ここから相互作用説は、我々の他者認知を解明するために「二人称的」な間主観的關係に注目することを提案している。二人称的關係とは、私あるいは他者の行為が、相互に一定の行為や応答を動機づけたり、促したり、要求したりするような「行為の当事者」同士で構成される関係である。ギャラガーによると、我々は「多くの場合、何らかのコミュニケーション行為やプロジェクト、あらかじめ定義された関係の中で他者と相互作用しており、我々と相互作用する可能性があるものとして他者を扱っている」 (Gallagher 2020: 100)。そして我々の他者認知の実態を明らかにするためには、こうした相互作用的な関係にこそ注目すべきなのである。

第二に、相互作用説は、上記のような二人称的關係を「評価的理解 (evaluative understanding)」という概念を用いて特徴づけている (Gallagher 2005: 213; cf. Gallagher 2020)。二人称的な相

相互作用が通常の仕方で進行するとき、我々は、ただ相手の振る舞いを知覚するだけで、適切な応答を適切なタイミングで返すことができる。そしてこのような場合には、少なくともそうした応答ができる程度には、相手の心的状態を正しく把握できている。このような場合に働いている他者の理解が、評価的理解と呼ばれるものである。この理解が「評価的」と呼ばれるのは、それが相手の振る舞いをある一定の価値を帯びたものとして把握することを意味するからである。すなわち、この理解を働かせながら相互に作用するとき、当の主体同士は、相手の振る舞いを自分に対し一定の応答を引き出し、動機づけ、また適切にするようなものとして把握している。そして、この評価的理解は、通常の円滑な二人称的關係の中では常に暗黙的な仕方で行われている。例えば、餅つきの場面を想定してみよう。餅つきは、杵で餅をつく主体と臼の中の餅を混ぜる主体の間で行われる相互的な行為である。餅つきの中で、二人の主体は（この行為に慣れているとすれば）、相互に相手の振る舞いから導かれる適切な応答を暗黙的に選択し、適切なタイミングでそれを行うことができる。ここでは、相手が有している心的状態（「杵を振り下ろしたい」や「餅を混ぜたい」などの欲求や意図）を理論的に推論したりシミュレーションする必要はない。こうした例が典型的に示すように、我々の他者認知の多くは、意識的な操作を差し挟むことなく、他者の欲求や意図を行為の中から直接的に汲み取るという仕方でなされており、相互作用説によれば、こうした直接的な認知は、他者の振る舞いの評価的理解という仕方で成立しているのである。

さて以上が、相互作用説の概要である。すでに示唆したように、本稿の見立てでは、この説は前節までに挙げた四つの制約を満たす他者認識理論になりうるポテンシャルを持っている。以下ではそのことを示すため、相互作用説の内容を、その提唱者ギャラガーが明示的に述べていることを超えて展開してみたい。その議論の道筋は次のようなものである。まず我々は、上でいわれた「評価的理解」が、一般に技能知と呼ばれるものの一種として捉えられるということに注意を促す。そして次に、評価的理解を技能知の一種として捉えることで、他者の知覚的・直接的な認識に「ナラティブ的理解」と呼ばれる契機が本質的に関わるのが自然に理解できるようになることを示す。そしてこのことは、前節の四つ目の制約で示した他者認識における「豊かさの差異」を、直接知覚説の枠内で説明することを可能にすると論じる。

まずは、評価的理解と技能知の関係について確認しよう。技能知とは、例えば、自転車の乗り方、平泳ぎの仕方、日本語の話し方などを対象とした実践的な能力であり、命題知の形で明示的に表わすことが不可能（か極めて困難）な暗黙的知識とされる。これらの知識は、実践的・暗黙的能力が一般にそうであるように、自動性（非意識性）、効率性、熟練性、瞬時性などの特徴をしばしば伴うとされる。そして相互作用説がいうところの評価的理解も、確かにこのような能力の発揮として捉えることができる⁸。例えば、「笑顔で挨拶してくる相手にこちらも自然に笑顔で挨拶し返す」ことができるとき、我々は、他者が「いかなる欲求

⁸ 信原によれば、他者の心的状態に対する技能知は「相手の心的状態を命題的に理解することなく、相手の表情や振る舞いに適切に応答する能力」であると規定される（信原 2014: 212）。

をもっているか」や「自分のことをどのように考えているか」などのことをわざわざ考えることなく、他者の心的状態についての一定の認識ができています。このような認識は、他者の心的状態を主題的に捉え、それを推論によって他者に帰属させるという命題知的な理解とは異なるものである⁹。

評価的理解を技能知の一種として捉え直すことは、前節で述べた他者認知の「豊かさの差異」を説明するうえで重要な、いくつかの観点をもたらす。第一に、一般に技能知については、習熟度や巧みさに関する「程度の差」を問題にすることができる。例えば、自転車の乗り方や平泳ぎの仕方を知っている人の中でも、その技能の習熟度や熟練度は、達人級から一応できるという程度まで様々であろう。そして、いま問題にしている他者認知の豊かさの違いは、他者への応答に関する技能知の深さの違いから生じたものとして捉えることができる。例えば、うなだれている子どもを見たときや、「飲み物が欲しい」と言われたときに我々が行う応答は、相手の意図や期待を正しく捉えたものであったり、逆にまったく的外れでそぐわないものであったりする。他者への応答の適切さに関するこうした違いは、「その特定の他者と評価的理解を通じてやりとりする」という技能知に私がどれだけ習熟しているかに関する違いから生じたものであるといえる。

また、技能知について一般にいえる第二の点は、それぞれの技能知は、それぞれ特定の種類の情報を活性化させたり、それに敏感に反応したりする能力を含んでいることである。例えば、自転車の乗り方を覚えるためには、体軸の傾きや進行速度、手足の位置などに関する情報に敏感に反応して、然るべき調整を行う能力を身に着けることが必要であろう。また同様に、平泳ぎをする、日本語を話す、といった他の技能も、それぞれ異なる種類の情報に対する敏感さや活性化の能力を必要とし、当の技能の習熟度は、そのような能力の習得の度合いによって大きく左右されるであろう。

では、ある他者の評価的理解においてこの能力に当たるものは何か。本稿は、それを当の他者に関する「ナラティブ（物語的な文脈）的理解」であると考え¹⁰。ここでのナラティブ的理解とは、相手の性格やその固有の歴史性、自他の置かれている文脈などに関する理解のことである¹¹。D・D・ハットによれば、我々は、様々な種類のナラティブを学ぶことで他者の振る舞いに「性格や歴史、そしてその他の関わりがどのように影響しているのか」を理

⁹ 信原によれば、他者に対する命題知は「他者がどのような心的状態にあるかを命題で表し、その命題を真なるものとして受け取るような知のあり方」と規定される（信原 2014: 211）。理論説やシミュレーション説が推論やシミュレーションという操作で捉えようとしているのは、このような命題知である。

¹⁰ 実のところ、他者認知におけるナラティブ理解の重要性についてはギャラガーもある論文で触れている（Gallagher 2016）。ただし、同論文で彼が強調するのは、ある程度高度な知的操作を含む他者認知におけるナラティブの役割であり、本稿で論じている直接的・知覚的な他者認知のレベルでのナラティブ的要素の働きには焦点が当てられていない。また関連して、評価的理解の概念がナラティブ的理解とどう関連しているかについても表立って論じられていない。

¹¹ 本稿が扱う「ナラティブ」は、臨床心理学などの「ナラティブ・アプローチ」や「ナラティブ・セラピー」で用いられているものとは厳密には意味が異なる（cf. 子安 et al. 2021）。すなわち本稿での「ナラティブ」は「主体が紡ぎ出す語り」だけを意味するのではなく、自己と他者がともに形作る状況や関係性を意図したものである。

解することができる(Hutto 2008: 29)¹²。実際、技能知の一種としての評価的理解は、相手と自己の間で形成される関係性や、相手の置かれた文脈の理解の深さに大きく依存するといえる。前節で取り上げた、食事中に他者が「飲み物が欲しい」と私に語りかける場面を今一度考えてみよう。私は、それがよく知っている他者(例えば、家族や親しい友人)であれば、これまでの経験から形成されるナラティブ的理解によって適切な飲み物を渡すことができる。例えば「この人は朝食では牛乳を、夕食ではお茶を飲むのを好む」であったり、「この人は猫舌だからいつもは冷たい飲み物を好むが最近健康のために温かいものを飲むようにしている」などのナラティブ的理解によって、他者へのより適切な応答が可能になるのである。それに対して、初めて食事を共にする他者であれば、十分なナラティブ的理解を行うことが出来ず、その人が求めている飲み物をスムーズに渡すことはできないであろう。

この例からもわかるように、評価的理解がうまく働き適切な応答ができるかどうか、言い換えれば、他者に関してどのくらい豊かで正確な認識を持ちうるかは、我々がその他者との程度馴染んでいるのか(=他者自身のナラティブや、自己が他者とともに形成するナラティブをどの程度把握しているのか)に応じて大きく変化する。我々の他者認識は、その都度単発で起こる心的状態を超え、他者との関係性や他者の置かれている状況にまで及ぶのであり、他者への適切な応答をもたらす評価的理解は、そうした状況や背景についてのナラティブ的理解に裏打ちされて初めて可能になる¹³。ただしあらためて注意しておく、こうしたナラティブ的理解の働きは、あくまで知覚的・直接的な他者認知の構成契機として捉えるべきものである。つまりそれは、評価的理解という暗黙的過程を構成する一契機として、明示的推論などの意識的操作とは区別された働きとして理解すべきものである。

それでは、このような相互作用説は、他者認知理論の制約条件を満たしているのだろうか。本節の最後にこの点を確認しておこう。第一に、相互作用説は、他者の心的状態の認識を技能知の一種である評価的理解による振る舞いへの応答という仕方で説明している。それゆえ、直接性制約を満たしている。第二に、評価的理解は、たしかに適切な応答という仕方で相手の心的状態を認識することである。しかし、適切な応答ができていても相手の心的状態は完全に明らかになっているわけではない。すなわち、評価的理解をしているときにも、その都度他者の心的状態の隠された部分は残り続ける。それゆえ、超越性制約を満たしてい

¹² ハットは、このような理解を「ナラティブ実践仮説(narrative practice hypothesis)」と呼ばれる理論を手がかりにして考察している(Hutto 2008)。ただしこの仮説は、あくまでも素朴心理学、つまり命題知の獲得を念頭においた理論であり、本稿の立場とは異なる。

¹³ もちろんこのように言うことは、一般に「ナラティブ的理解」と呼ばれる契機が、比較的高度な他者認知——他者との関係や状況の明示的認知を基にした意識的推論などの形で行われるそれ——においても重要な役割を果たすことを否定するものではない。本稿が強調したいのは、広く「ナラティブ的理解」と呼ぶ契機がそのような意識的認知だけではなく、すでに他者の心的状態の知覚的認知においても本質的な役割を果たしているという点である。その意味で、ここで論じているナラティブ的理解は受動的な層に属するものといえる。ただし、例えば自閉症児の他者認知に関する研究などが示唆するように、こうした受動的な層の説明においてはより根源的な層(例えば、間身体性の領域)を考慮する必要があるかもしれない。本稿では、紙幅の都合からこれ以上立ち入ることはできないが、決してそのような根源的な他者認知の層の可能性を否定するものではないことを強調しておきたい。

る。第三に、評価的理解は、自己と他者の相互作用の中で行われるものであるため、互いに相手の心的状態は決して不可知なわけではなく、相互の働きかけの中で常に明らかになる可能性を有している。それゆえ、アクセス可能性制約を満たしている。第四に、本節でのこれまでの議論を通して、相互作用説が他者に対する認知の豊かさを説明しうるものであることを示された。それゆえ、本稿が提案している四つ目の制約を満たしている。

おわりに

本稿では、「心の理論」論争の代替案として提案されている直接知覚説の発展バージョンである共現前説と相互作用説について検討した。それによれば共現前説は、他者認知理論が満たさなければならない三つの制約を満たし、我々にとって隠された他者の心的状態の認識を説明することには成功している。しかし共現前説は、我々の他者認知がより豊かな内容を持ちうるということを十分に論じられていない。これについて本稿では、三つの制約に対して新たな制約を加える必要があると提案した。そして、本稿ではこの新たな制約を加えた四つの制約を満たす理論が相互作用説であると論じた。相互作用説によれば、我々は、他者の振る舞いに対して適切な「評価的理解」（これがナラティブ的理解と本質的な関連を持ちうることは上で示唆した）を通じて関わるという仕方、その心的状態を認識できているのである。

最後に、今後の課題について簡単に述べておきたい。第一に、本稿で注目した相互作用説は、自己と他者の二人称的関係を根本に置いているが、我々の日常的な他者認知では、理論説やシミュレーション説が主張するような他者を三人称的関係の中で認識するようなケースがあるのも確かである。それゆえ、そのような三人称的関係での他者認知と二人称的関係での他者認知の関係は、さらに考察すべき課題として残されている。第二に、本稿は、相互作用説とナラティブ的理解が重要な連関をなしていることを強調し、ナラティブ理論の重要性を強調するハットやギャラガーとは異なる仕方、直接知覚説の新たな展開可能性を明らかにした。今後さらにナラティブ理論と直接知覚説の関係を考察するために、彼らの議論との比較検討などの詳細な分析を進めていくことが必要であろう。

文献

- Barlassina, Luca and Gordon, Robert M, 2017, "Folk Psychology as Mental Simulation," *The Stanford Encyclopedia of Philosophy*, URL=<<https://plato.stanford.edu/entries/folkpsych-simulation/>>[accessed 2021/10/06].
- Churchland, Paul M, 1989, "Folk Psychology and the Explanation of Human Behavior," *Philosophical Perspectives*, 3, 225-241.
- Gallagher, Shaun, 2001, "The Practice of Mind: Theory, Simulation or Primary Interaction?," *Journal of Consciousness Studies*, 8 (5-7), 83-108.

- , 2005, *How the Body Shapes the Mind*, Oxford: Oxford University Press.
- , 2016, “The Minds of Others,” in Dahlstrom, Daniel O (ed.), *Philosophy of Mind and Phenomenology*, New York and London: Routledge, 117-138.
- , 2020, *Action and Interaction*, Oxford: Oxford University Press.
- Gangopadhyay, Nivedita and Miyahara, Katsunori, 2015, “Perception and the problem of access to other minds,” *Philosophical Psychology*, 28 (5), 695-714.
- Goldman, Alvin I, 2006, *Simulating Minds: The Philosophy, Psychology, and Neuroscience of Mindreading*, Oxford: Oxford University Press.
- Hutto, Daniel D, 2008, *Folk Psychological Narratives: The Sociocultural Basis of Understanding Reasons*, Cambridge: The MIT Press.
- Hutto, Daniel D, and Ravenscroft, Ian, 2021, “Folk Psychology as a Theory,” *The Stanford Encyclopedia of Philosophy*, URL=<<https://plato.stanford.edu/entries/folkpsych-theory/>>[accessed 2021/10/06].
- Merleau-Ponty, M, 1945, *Phénoménologie de la perception*, Gallimard.
- Ratcliffe, Matthew, 2007, *Rethinking Commonsense Psychology: A Critique of Folk Psychology, Theory of Mind and Simulation*, Basingstoke: Palgrave Macmillan.
- Scheler, Max, 1973, *Wesen und Formen der Sympathie*, Bern und München: Francke.
- Smith, Joel, 2010, “Seeing Other People,” *Philosophy and Phenomenological Research*, 81 (3), 731-748.
- 池田喬・八重樫徹、2013、「共感の現象学」序説」、『行為論研究』第3号、11-35.
- 金杉武司、2007、『心の哲学入門』、勁草書房.
- 子安増生、2000、『心の理論 心を読む心の科学』、岩波書店.
- 子安増生・丹野義彦・箱田祐二編、2021、『有斐閣 現代心理学辞典』、有斐閣.
- 信原幸弘・太田紘史編、2014、『シリーズ 新・心の哲学 I 認知篇』、勁草書房.

(たなか かなた・千葉大学)